

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月25日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21760497

研究課題名（和文）

セバステアノー・セルリオの建築書における古代建築の解釈に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Interpretations of Ancient Architecture in Sebastiano Serlio's Books on Architecture

研究代表者

飛ヶ谷 潤一郎 (HIGAYA Junichiro)

東北大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：30502744

研究成果の概要（和文）：

東日本大震災により研究室が被災したため、本研究では当初予定していたセルリオの建築書の『第四書』、『第三書』、『第五書』、『第七書』の四つのうち、『第四書』と『第五書』に限定して何篇かの論稿を投稿または発表するにとどまった。しかし、聖堂ファサードや戸口については、部材の構造と装飾との関係を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

Since our laboratory suffered from the 2011 Great Eastern Japan Earthquake, although we had planned to study on Sebastiano Serlio's Architectural Books 3, 4, 5 and 7, we had to limit our subject to Books 4 and 5. We wrote some papers which clarify the relationships between architectural structure and decoration about building façades or doors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：建築学

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：セルリオ、建築書、ヴェネツィア、ローマ、パリ

1. 研究開始当初の背景

ルネサンスの建築家セバステアノー・セルリオの建築書は、ヴィニョーラの『建築の五つのオーダー』やパラディオの『建築四書』と並ぶ16世紀の三大建築書のひとつとしてきわめて有名なものである。これらのうちでヴィニョーラとパラディオの建築書についてはすでに邦訳も出版されており、セルリオの建築書についても英語訳は出版されているものの、わが国における既往研究

はわずかにとどまっている。というのも、わが国における西洋近世建築史研究では、国ごとの縦割り区分によって研究対象が限定される傾向があるので、イタリアとフランスの両国で活躍したセルリオについては研究が進んでいなかったものと推測される。また、わが国においてもオーダーの研究者は少なくはないが、五つのオーダーの比較図が最初に掲載されたのがセルリオの建築書であったという点でも、オーダー研究においては

とより、西洋近世建築史研究においてもこの建築書を研究する意義は大きいものと思われる。

一方海外におけるセルリオ研究については、建築書のリプリント版や翻訳書が出版された際に付録として設けられた図版の解説にとどまっている。また、現在出版されているセルリオに関する何点かの研究書は、イタリアでの活動とフランスでの活動それぞれについての個別研究に限定されている。確かに彼の建築書については、『第四書』と『第三書』はイタリアで出版されながらも、『第一書』、『第二書』、『第五書』、『番外編』の四つはフランスで出版されたという経緯をもつ。けれども、彼自身が述べているように、彼が建築書を執筆するにあたって七書からなる全体の計画を立てていたことについては、まずまちがいない。したがって、各書は互いに密接な関係性をもっていると捉え直すべきであろう。

報告者が本研究の着想にいたったのは、2003年度東京大学大学院学位論文と、その増補改訂版にあたる『盛期ルネサンスの古代建築の解釈』（中央公論美術出版、2007年）においてしばしば参照したのがセルリオの建築書だったからである。しかし、学位論文ではセルリオの師であるバルダッサレ・ペルッツィについてのヴァザーリの伝記を付録として翻訳し、解説するところで当面の結論としたが、今後の課題としても述べたように、セルリオの建築書についてまでは十分に論じることができなかったからである。すなわち、本研究は学位論文の内容をさらに発展させるという性格をもっており、彼の建築書の読解にあたっては学位論文のテーマであった「古代建築の解釈」という観点からその内容を明らかにしたいと考えている。

2. 研究の目的

前述のように、セルリオの建築書は七つの書と番外編によって構成されている。これらのうちで最も重要であるのは、オーダーに関する『第四書』（1537年）と、古代建築に関する『第三書』（1540年）であり、これらを翻訳する意義はきわめて大きい。しかしこれらに関する既往研究も多いので、新たな視点から検討し直す必要がある。セルリオはこれらの執筆にあたって、師であるペルッツィ（1481～1536年）の素描集を相続して参考にしたが、ペルッツィの影響は彼と同郷のピエトロ・カタネオの『建築書』（1554年）にも見られるので、セルリオをいっそう正しく理解するにはセルリオとカタネオの両

建築書を比較検討する必要がある。カタネオに関する既往研究は少ないが、古代建築の解釈という点で彼はかなり正確な知識をもっていたと思われる。この建築書では「第五書」でオーダー、「第三書」で宗教建築が論じられているので、これらの記述内容や図面表現の特徴などを解明することによって、同じくペルッツィの影響下にあったセルリオの建築書『第四書』と『第三書』の研究が一段と深まるものと予測される。なお、セルリオの建築書『第五書』（1547年）は宗教建築について論じられたものなので、同『第三書』はもとより、カタネオの『建築書』「第三書」とも密接に関わることになる。

次に重要であるのは、敷地に関する『第七書』（1575年）と、住宅に関する『第六書』（出版されず）であるが、前者の出版もセルリオの死後であり、いずれにおいても晩年のフランスでの活動による成果が大きく反映されている。従来の研究では、このようなフランスでの晩年のセルリオの活動については、建築書全体を構想していた1520年代末から1541年までのイタリアでの初期の活動とはひとまず切り離されて考えられていた。しかしながら、とりわけ『第七書』について見ると、さまざまなビルディング・タイプが扱われているが、宗教建築はすでに『第五書』で扱われており、同じテーマが繰り返し登場する。さらに、この『第五書』で扱われたテーマも、古代建築に関する『第三書』や、幾何学に関する『第一書』（1545年）と関連する部分が多く、『第七書』はむしろ建築書全体の総まとめとして位置づけし直す必要がある。

『第七書』についても、まずは古代建築の解釈という観点から分析することになるが、この書では左右対称形の敷地のみならず、しばしば不規則な形の敷地に設計された例が登場する点が、他の建築書とは大きく異なった特徴となっている。というのも、ルネサンス建築では集中式平面が支配的であり、従来の建築書では建物に主眼が置かれ、敷地との関係にはほとんど注目されなかったからである。ここには不規則な形の敷地においてもうまく設計することが得意であったペルッツィの影響がうかがえ、フランスでのセルリオの晩年についても初期のローマでの活動との連続性は看過できない要素となっている。

本研究においては、わが国における従来の西洋近世建築史研究、とりわけオーダー研究や建築書研究のよき伝統を踏襲した上で、まずはセルリオの建築書『第四書』を中心に翻

訳と注解作業を行うことになるが、学術的な意義は、彼のイタリアとフランスでの活動を連続的に捉えながら、国ごとに縦割り区分して行う従来の観点からは十分に論じられてこなかったこの建築書の各書を横断的に再検討する点にある。またその作業にあたっては、海外においても研究が十分に進んでいないカターネオの『建築書』との比較検討を行うことによって、いずれの建築書にも影響を及ぼしたペルッツィの役割も解明されることが期待される。

イタリア・ルネサンス建築研究に本格的に取り組む以上は、膨大な既往研究を咀嚼することが不可欠であるが、報告者は学位論文で導入した「正しい理解のみならず、誤解ももとした古代建築の解釈」という新たな観点によって、盛期ルネサンス建築に通底する創作のメカニズムを明らかにした点が独創的と評価され、2007年度地中海学会ヘレンド賞、2008年度建築史学会賞、2013年度日本建築学会著作賞を受賞するにいたった。本研究もこの発展線上にあり、セルリオの建築書を読解するにあたって有効な手段となりうると思われる。この建築書の全体像の解明については今後の課題となるが、本研究によって16世紀における建築書やオーダーの変遷史がいつそう正確に把握できるようになることが期待される。

3. 研究の方法

前記の研究目的にしたがい、おもに七つの書からなるセルリオの建築書のうちの『第四書』、『第三書』、『第五書』、『第七書』の四つを研究対象とし、一書の研究につきそれぞれ1年を割り当てる。これらのうちで最初の二つは、セルリオがイタリア滞在中に出版されたものなので、関連する遺構の調査という点からも、イタリアについては最初の2年、フランスについては残りの2年というように毎年1回の海外調査を割り当てる計画で進める計画であった。ところが、2011年の東日本大震災により研究室が被災したため、実際には『第四書』と『第五書』についてしか、研究成果を残すことができなかったことを断わっておきたい。

具体的な方法については、文献と遺構の両面に基づく研究となるが、前者に関しておもに利用するテキストはフィオーレ編による以下の初版本のリプリント版である。また翻訳にあたってはこの書を底本とし、ハートとヒックス編による英語版を参照する。なお、フィオーレ教授はセルリオ研究の第一人者のひとりであり、報告者がローマ「ラ・サピ

エンツァ」大学に留学していたときにお世話になった指導教官でもある。

Sebastiano Serlio, L'Architettura, a cura di F. P. Fiore, 2 voll., Edizioni Il Polifilo, Milano, 2001.

Sebastiano Serlio, On Architecture, eds. V. Hart, P. Hicks, 2 vols., Yale University Press, New Haven-London, 1996-2001.

次に建築書と照らし合わせながら、セルリオがイタリアにおいて影響を受け建築書に掲載した古代および同時代のルネサンス建築、また彼自身がフランスで設計した建築を実際に訪れて写真撮影や関連図面の入手などに取り組む。イタリアではおもにローマとヴェネツィア、そしてそれら周辺の建築、フランスではフォンテーヌブロー、アンシー＝ル＝フランなどにあたる。

4. 研究成果

(1) 2009年度

セルリオの建築書のうちでは最初に出版された『第四書』の研究から着手した。この書ではオーダーが論じられているので、ウィトルウィウス『建築十書』やアルベルティ『建築論』などの建築理論書との比較検討はもとより、現存する古代ローマの遺跡やルネサンス建築との比較検討を試みた。遺構の調査に関しては、ヴェネツィアやヴェローナなどの北イタリアを中心に訪れた。その成果は後述の5〔学会発表〕④に見られるように、聖堂ファサード上層のスクロールの構造と装飾との関係が明らかにした。

聖堂については、これと関連して『第五書』の研究にも取り組み、後述の5〔図書〕②において、聖堂ドームに着目したときに、セルリオが手本とした古代建築を明らかにした。なお、『第四書』については翻訳と注解も試みたので、別の機会に出版助成を得ることによって研究書として公開したいと考えている。

(2) 2010年度

当初はセルリオの建築書のうちで2番目に出版された『第三書』の研究に取り組む予定であったが、1年目に計画していた『第四書』の翻訳作業に多くの時間を要したため、引き続き『第四書』のオーダーの研究に取り組んだ。その成果は後述の5〔雑誌論文〕③に見られるように、イタリア・ルネサンスの建築書とオーダーについて、現在どこまで研究が

進められているのかをまとめることができた。

報告者は学位論文執筆時からオーダーと密接な関係をもつ戸口にも関心を抱き、いくつかの論稿を発表してきたが、2010年には後述の5〔学会発表〕③において、その一種であるイオニア式戸口の特徴について考察を試みた。また同様に、翌2011年には後述の5〔学会発表〕②において、ナポリのパラッツォを例に、建築家と建築主の関係や、実際の戸口とセルリオの建築書の関係について考察を試みた。

(3)2011年度

3年目からはフランスにおけるセルリオに関する研究を開始し、フランスで出版された『第五書』の研究に取り組む予定であったが、前述のように1年目に『第五書』のドームに関する論稿を発表することができたので、セルリオが招かれたフォンテーヌブロー宮殿や、ブルゴーニュ地方のアンシー＝ル＝フランの城館を中心とした遺構の調査に取り組んだ。ところが、東日本大震災により研究室が被災したため、この年は前年度にやり残した研究や翻訳作業を細々と続けることしかできなかった。その成果は後述の5〔雑誌論文〕②に見られるように、聖堂ファサードと平面の関係について考察を試みた。

(4)2012年度

被災により当初の予定は大幅に遅れたため、『第三書』と『第七書』の研究は断念せざるをえなくなったので、今後の課題としたい。最後の年にも、前年度にやり残した研究や翻訳作業を続けることになったが、その成果は後述の5〔学会発表〕①に見られるように、聖堂ファサードに見られる古代と中世の要素について考察を試みた。

以上より、本研究で得られた結論は次のようにまとめることができる。

- ① セルリオの建築書『第四書』に描かれた二層構成の聖堂ファサードについて、上層に設けられたスクロールは装飾としてのみならず、構造としての役割もそなえている。
- ② セルリオの建築書『第四書』に描かれたイオニア式戸口について、戸口両脇に設けられたスクロールは装飾としての役割にとどまり、構造としての役割はそなえていない例が大半である。

- ③ セルリオの建築書『第五書』に描かれたドームについて、円形や多角形などの単純な集中式平面の宗教建築では、主にパンテオンを手本としたドームを好んで用いられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 飛ヶ谷潤一郎、書評 桐敷真次郎編著『スコット「ヒューマニズムの建築」注解』、建築史学、査読有、60号、2013年、107-120ページ
- ② 飛ヶ谷潤一郎、15世紀イタリアの聖堂ファサードと集中式平面との関係について、「建築」としての教会堂、第2回西洋建築史若手研究者研究発表会、査読無、2011年、22-29ページ
- ③ 飛ヶ谷潤一郎、学会展望 イタリア・ルネサンス建築史：建築書やオーダーに関する研究を中心に、建築史学、査読有、55号、2010年、72-92ページ
- ④ 飛ヶ谷潤一郎、書評 渡辺真弓著『パラディオの時代のヴェネツィア』、建築史学、査読有、55号、2010年、140-145ページ
- ⑤ 飛ヶ谷潤一郎、南イタリアのルネサンス建築に見られる中世的要素、鹿島学術振興財団2010年度年報、査読無、35号、2010年、95-100ページ
- ⑥ 飛ヶ谷潤一郎、主旨説明 海から見た都市と建築、日本建築学会2009年度大会(東北)、建築歴史・意匠部門パネルディスカッション、査読無、2009年、1-4ページ

〔学会発表〕(計4件)

- ① 飛ヶ谷潤一郎、アックアヴィーヴァ・デッレ・フォンティ大聖堂ファサードに見る古代と中世の要素、日本建築学会2012年度大会(東海)、学術講演梗概集、F-2 建築歴史・意匠、2012年9月12日、名古屋
- ② 飛ヶ谷潤一郎、パラッツォ・カラーファのイオニア式戸口について、日本建築学会2011年度大会(関東)、学術講演梗概

集、F-2 建築歴史・意匠、2011 年 8 月 24 日、東京

- ③ 飛ヶ谷潤一郎、セルリオのイオニア式戸口の解釈、日本建築学会 2010 年度大会（北陸）、学術講演梗概集、F-2 建築歴史・意匠、2010 年 9 月 11 日、富山
- ④ 飛ヶ谷潤一郎、セルリオの建築書『第四書』の聖堂ファサード（c ページ 54r）について、日本建築学会 2009 年度大会（東北）、学術講演梗概集、F-2 建築歴史・意匠、2009 年 8 月 26 日、仙台

〔図書〕（計 3 件）

- ① 飛ヶ谷潤一郎、ローマの盛期ルネサンス建築、イタリア文化事典、西本晃二、飛ヶ谷潤一郎ほか 142 名、丸善出版、2011、300-301 ページ
- ② 飛ヶ谷潤一郎、セバスティアノー・セルリオの建築書『第五書』のドームについて、建築史攷、鈴木博之先生献呈論文集委員会編、中央公論美術出版、査読有、2009、75-88 ページ
- ③ 飛ヶ谷潤一郎、「アーチ」ほか 57 項目、建築デザイン用語辞典、飛ヶ谷潤一郎ほか 42 名、井上書院、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飛ヶ谷 潤一郎 (HIGAYA Junichiro)
東北大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：30502744